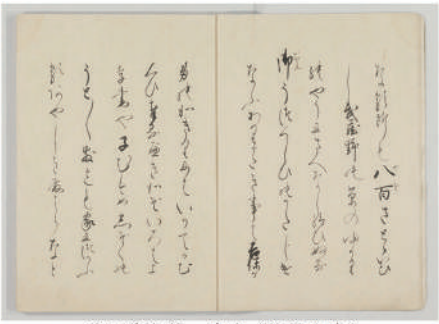
柳沢文庫だより　第 49 号　　令和 4 年 (2022) 9 月 10 日

柳澤吉保が『楽只堂年録』にかけた思い

柳沢文庫には、初代柳澤吉保（1658 ～ 1714）の誕生から隠居までのおよそ 52 年間の日々を日記形式で綴った『楽只堂年録』が伝来し、元禄・宝永期の政治や文化を伝える貴重な歴史資料として知られています。吉保は 5 代将軍徳川綱吉の側用人として活躍しましたが、両者は学問や度重なる「御成り」を通じ、主従の枠を超えた深い信頼関係を築きました。『楽只堂年録』には、江戸城での日常的な奉公の様子、吉保が家族・家臣たちと詠んだ和歌や禅僧と交わした問答、さらには宝永地震の全国的な被害報告など、様々な情報が記されています。

吉保は生涯にわたりこの日記を大切にしましたが、どうしてこの執筆を思い立ったのでしょうか。序文には以下のように記されています。

柳澤吉保像（個人蔵）



楽只堂年録　序文（柳沢文庫）

将軍家から受けた恩寵のありがたさは、家族、親族、家臣にまで及び、吉保一人ではとても報いることができないほどである。せめてこれらの百分の一なりとも書き記し、家蔵して後代に伝えたならば、我が子孫が続く限りは、吉保のこの心が失われることはないだろう。それが家を保ち、国を安んじることにつながれば、本望である。（意訳）

執筆体制については不明な点が多いのですが、漢学者荻生徂徠をはじめとする家臣たちが編集に携わったことがわかっています。元禄 15 年（1702）の火事で江戸屋敷の記録が焼失した際は、彼らが中心となって資料収集や家中の男女・古老らへの聞き取りを行い、日記の復元に努めました。また、筆まめな吉保は、江戸城内での出来事を自筆のメモ（書付）にまとめて提供するといった協力を惜しみませんでした。さらに、正本とされる真名本（漢文体）のみならず、ほぼ同一内容の仮名本（仮名まじりの和文体）を備えた点も大きな特徴です。吉保自身は漢文を読みこなす教養の持ち主でしたが、読み手には和文体が便利であると考えたらしく、そのために真名本・仮名本それぞれ 229 巻、合計 458 冊という長大な日記が完成しました。

このように、吉保が受けた恩寵を子孫に伝えることを目的とし、「家の記録」として家中一丸となって完成させたのが『楽只堂年録』だったのです。そして、吉保が日記にかけた思いは、次代吉里の『福寿堂年録』以下、後代の年録編纂にも受け継がれることとなりました。

令和４年度（2022 年度）特別展のご案内

「大名家の日記 - 柳澤家当主四代の記憶と記録 -」

会　期：令和４年９月 10 日（土）～ 12 月 18 日（日）
休館日：月曜・第４火曜日（ともに祝日の場合は開館。但し、10/10（月・祝）は休館）

※新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大防止のため、状況に応じて休館する場合があります。
詳細は柳沢文庫ホームページ（http://www.mahoroba.ne.jp/~yngbunko）のお知らせを見ていただくか、
お電話（0743-58-2171）でお問い合わせ下さい。

柳沢文庫は、近世大名柳澤家の江戸屋敷に伝来した古文書・典籍・絵画などの資料を多数所蔵しています。その中核を占めるのが、計 1800 冊にのぼる歴代当主の年録・日記類です。初代吉保の『楽只堂年録』、２代吉里の『福寿堂年録』、３代信鴻の『幽蘭台年録』、４代保光の『虚白堂年録』、さらには江戸の女流文学として名高い『松陰日記』や大名の隠居生活を綴った『宴遊日記』『松鶴日記』など、いずれも江戸時代の大名に関する貴重な歴史資料として関心を集めてきました。

本展では、これらの日記が、初代吉保以後、四代にわたり書き継がれる様子をご紹介し、それぞれに登場する絵画作品などとあわせて展示します。

以下では、展示の理解を深めていただくためのポイントをご紹介します。

柳澤家歴代当主の年録・附記および日記（柳沢文庫）

①柳澤吉保（1658 ～ 1714）

・『楽只堂年録』　真名本：全 229 冊（1 ～ 10 巻焼失）、仮名本：全 229 冊

柳澤家で作成された日記について語る上で、初代吉保の時代に醸成された好学の気運は欠かすことができません。学問好きな将軍綱吉に仕えた吉保は、その「学文の御弟子」を仰せつかり、日々学問に打ち込むとともに、荻生徂徠をはじめ多くの学者を召し抱えました。

とくに和歌に熱心で、国学者北村季吟から古今伝受（「古今和歌集」や歌道の秘伝を授けられること）を受けます。さらに、ときの上皇霊元院は、執務の合間を縫って歌道に精進する吉保に感心して和歌の添削を引き受けます。これによって、吉保は京都の歌壇との交流を認められることになりました。また、20 歳の頃から励んだ参禅の記録は「護法常応録」（霊元院勅題）にまとめられます。『楽只堂年録』では、こうした学問関係の記事も充実し、重点的に記録しています。

②柳澤吉里（1687 ～ 1745）

・『福寿堂年録』　全 443 冊（32 巻・56 巻欠）　※草稿本も伝来

吉里時代の柳澤家は、大名に取り立てられてからの経験がまだ浅く、幕府とのやり取りで困ることも多かったようです。そのため、江戸屋敷から幕府に提出した書類を丸ごと収録するなど、記録・情報の蓄積に努めました。その結果、幕府に届け出た内容を中心に、甲府城･郡山城や領地に関する情報も充実しました。

吉里自身は父の薫陶を受けて和歌を好んだため、その心情は歌とともに私家集にまとめました。「積玉和歌集」には、江戸から甲府城までの旅行記なども収録されています。

徳川綱吉が２代吉里に与えた書
「福寿」（柳沢文庫）

③柳澤信鴻（1724 ～ 92）

- 『幽蘭台年録』 154 冊　『附記』 16 冊　※草稿本も伝来
- 『松平美濃守日誌』元服から当主時代（15 ～ 44 歳）にかけての自筆日記
- 『宴遊日記』隠居生活前半（50 ～ 62 歳）の自筆日記
- 『松鶴日記』隠居生活後半（63 歳～ 69 歳）の自筆日記

画才を高く評価された 3 代信鴻の描いた「牡丹錦鶏図」（柳沢文庫）

信鴻は、家臣が編集した『幽蘭台年録』とは別に、生涯にわたり自筆の日記を書き続けました。執筆期間は元服の翌年から晩年までで、じつに 55 年間におよびます（45 ～ 49 歳の分は不明）。そこでは成長とともに記載内容や量が充実する様子を追うことができ、信鴻が得意とした絵画に関する記事も散見します。とくに駒込下屋敷（六義園、東京都文京区）での隠居生活を綴った『宴遊日記』『松鶴日記』の豊富な記述は有名で、今なお多くの人を魅了しています。

④柳澤保光（1753 ～ 1817）

- 『虚白堂年録』 52 冊　『附記』 184 冊

保光の時代になると、もとは年録の付録の位置づけにあった『附記』の方が充実するようになります。この『附記』は、幕府との交渉を担当した江戸留守居ら役人たちの事務記録としての性格が強く、業務の効率化に有用だったようです。実用的な江戸日記として『附記』が重視されるようになる一方で、本体の『虚白堂年録』は簡素化しました。

なお、保光自身は和歌・書・茶・花・俳諧ほか諸芸に秀で、「堯山」の号が有名です。自身で綴った日記は伝わりませんが、京都の公家との学問交流に関する資料が多数残っています。

その後の年録・日記

5 代保泰の時代には『垂裕堂年録』が執筆されますが現存せず、『附記』55 冊のみが残ります。この『附記』も文政 9 年（1826）で終了し、6 代保興、7 代保申の時代の年録や日記は伝わりません。その理由はよくわかっていませんが、幕末の動乱の中、徐々に年録編纂事業が追い付かなくなったのではないかと推測されます。

当主各代の年録タイトルの「楽只堂」「福寿堂」「幽蘭台」「虚白堂」は、いずれも当主の号からとったものです。このうち、2 代吉里の「福寿堂」は、綱吉から与えられた書「福寿」に由来します。3 代信鴻は、郡山城内の自室を「幽蘭台」と名付け、これをタイトルとしました。

なお、年録や『附記』は、基本的に江戸屋敷で勤務する家臣たちによって、執筆・編集されました。いずれも柳澤家の「家の記録」として、その日の出来事を正確に後代に伝え残すことが求められたため、その責任は重大でした。

参考文献
『楽只堂年録』1 ～ 9（宮川葉子校訂、八木書店刊史料纂集）
『史料で読み解く日本史④　近世日記の世界』（福田千鶴・藤實久美子編、ミネルヴァ書房、2022 年）

〈柳澤家当主〉

①吉保 ― ②吉里 ― ③信鴻 ― ④保光

⑤保泰 ― ⑥保興 ― ⑦保申

★お知らせ★

※新型コロナウイルス感染症感染拡大の観点から、開催を延期または中止とすることがあります。
詳細はホームページのお知らせを見ていただくか、お電話でお問い合わせ下さい。

柳沢文庫 番屋カフェコンサート

令和４年 10 月 10 日（月・祝）15：00 ～ 16：30

二胡とキーボードのユニットによる演奏、歌や踊り。

出演者　華弦朱雀（かげんすざく）

場　所　郡山城跡内番屋カフェ屋外テラス ※雨天中止　　参加費　1,000 円（ワンドリンク・お茶菓子付き）

定　員　40 名 ※先着順。定員になり次第締切。

申込方法　電話（0743-58-2171）にて先着受付。受付時間 10 時～ 16 時。
※時間外は受け付けません。また、申込期間中、9/26・27、10/3 は柳沢文庫の休館日です。

申込期間　〈一般〉９月 17 日～ 10 月７日　　〈柳沢文庫友の会会員〉９月 13 日～ 10 月７日まで

番屋（ばんや）カフェ

郡山城追手向櫓前広場（柳沢文庫から徒歩すぐ）
営業時間：10 時～ 16 時（月・火曜は定休日）
電話番号：0743-25-1545

＜秋メニュー＞
『秋の味覚弁当』
にゅうめん付
1,500 円

特別展関連講演　柳沢文庫歴史塾（郡山学）

時　間　14：00 ～ 15：30　　会　場　DMG MORI やまと郡山城ホール　　定　員　90 名
参加費　200 円（柳沢文庫友の会会員の方は無料）

◆第２回９月 10 日（土）「江戸幕府の軍事戦略と郡山藩」※申込は終了しました。

講師　藤本仁文 氏（京都府立大学准教授）

◆第３回 10 月 29 日（土）「『楽只堂年録』を読む①　柳澤吉保を知る」

講師　宮川葉子 氏（元淑徳大学教授・柳沢文庫収蔵史料研究会委員）

※事前申込制。詳細は柳沢文庫ホームページをご覧下さい。

柳沢文庫販売物ご案内

『郡山城絵図集－江戸時代の郡山城を読みとく－』 2,500 円（2,250 円）
『柳沢文庫収蔵品図録』 2,000 円（1,800 円）
秋季特別展「筒井順慶」図録 1,000 円（900 円）
「柳澤吉保没後三〇〇年記念 柳澤家伝来の名品」展 図録 500 円（450 円）
『柳沢文庫収蔵品目録　軍令』 1,500 円
『柳沢文庫収蔵品目録　軸棚』 1,800 円
『柳澤藩家老「藪田家文書」の目録と解題』 3,500 円
『柳澤吉保の一面』 400 円（320 円）
柳沢史料集成　第５巻　4,000 円（3,200 円）
　　第６巻～第７巻　5,000 円（4,000 円）
　　第８巻～第 10 巻　7,000 円（5,600 円）
『大和郡山城天守台石垣岩石種調査報告書』 700 円（560 円）
『大和郡山藩主松平（柳澤）甲斐守保光
－茶の湯と和歌を愛した文人大名　堯山』 700 円（560 円）

『史料纂集　楽只堂年録』第１巻～第３巻　13,000 円（10,400 円）
　　第４巻～第８巻　14,000 円（11,200 円）
　　第９巻　15,000 円（12,000 円）
『江戸に生きて－正親町町子の半生－』 1,000 円
絵図セット（和州郡山藩家中図・享保家中図・大和郡山城） 500 円（400 円）
ポスター 郡山城絵図の世界 第二版 500 円（400 円）
御殿だるまシール 100 円
クリアファイル
・和州郡山藩家中図／柳澤信鴻筆 牡丹錦鶏図／徳川綱吉筆 過則勿憚改　各 350 円
・和州郡山藩家中図・牡丹錦鶏図・過則勿憚改 3 枚セット 1,000 円
・郡山城極楽橋 モノクロ 200 円／カラー 350 円
・山下繁雄筆　郡山城址初秋 350 円
絵はがき「城跡景観」8 枚セット 500 円（400 円）
郡山城来訪記念証〈御城印〉 300 円　※文庫受付のみにて販売

※（）は友の会会員価格です。表記のないものは割引はありません。

＊柳沢文庫では、友の会会員を募集しています。　年会費一般１，５００円／学生７５０円

公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会　〒 639-1011　奈良県大和郡山市城内町２－１８　Tel 0743-58-2171
http://www.mahoroba.ne.jp/~yngbunko　https://www.facebook.com/yanagisawabunko